インフィニットストラトス　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトス　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

【Ｎコード】
Ｎ６５１３Ｚ

【作者名】
ケン

【あらすじ】
宇宙大好き少年、織斑一夏と同じく宇宙大好き少女
如月太陽が出会うとき青春スイッチが押される。
その手で宇宙をつかみとれ！！青春スイッチオン！！！

プロローグ　初・変・身

一人の少年が縄で縛られ人質にされていた。
少年の名は織斑一夏。学校の帰り道でいきなり目の前に黒い車が止まり
黒服を着た男たちに無理やり車に押し込まれたわけである。
そして、隣にはもう一人少女が人質とされていた。
名は如月太陽。理由は定かではないが連れ込まれていた。
「ねえ、大丈夫？」
一夏は心配そうに少女に尋ねるが少女はけろっとした感じで答えた。
「うん。大丈夫だよ。誘拐なんてもうこれで何度目か」
「はは！！一緒だね。僕も結構な回数、誘拐されてるよ」
二人は何故か意気投合し、危機的状況にもかかわらず
喋って笑っていた。

「ねえ、ここから二人で抜け出しちゃおか」
「出来るの？そんな事」
「見ててよ」
一夏は腕をくねらせていくと数秒後には縄が解けてしまっていた。
「おお！！凄い！！」
「君のもほどいてあげるよ」
一夏は立ち上がり少女の縄もほどき周りに男たちがいないのを
確認してからその場を立ち去った。

「さて、ここからどうしようか」
「ん～ひとまず、私のカバ」
少女が言いかけたとたんに壁が突然、爆発を起こし大穴があいた。
「きゃあ！！」

「な、何！？」
「見つけたぞ！！くそ餓鬼ども！！」
「げ！逃げよう！！」
一夏は少女の手を取り走っていくが子供が大人を撒ける訳もなく
一つの部屋に追い込まれてしまった。
「たっく！なんでこんなガキどもをあいつらはさらってくれなんて
言ったのかね～。ま、良いや。どうせ、お前らはここで死ぬから」
男性は服のポケットからスイッチの様なものを取りだした。
形状はアイスクリームのコーンに似た形をしておりてっぺんには
赤いスイッチがあった。しかし、すぐに形状が変化した。
『ラスト・ワン』
「な、なんなの！？あれ」
「ひゃはははは！！死ね、くそ餓鬼ども！！」
男性がスイッチを押すと星座の様なものが浮かび上がり、男性が眉
に包まれて
怪人から出てきて、精神がゾディアーツとなった。
「あの星座はうみへび座のゾディアーツ！！」
「な、何なの！？そのゾ、ゾデアーツって」
「ゾディアーツ！！それよりも私のカバンはないの？」
少女が部屋を見渡すと机の上にスーツケースの様な大きなカバンが
見えた。

「あ、あった！！私のカバン！！」
少女はその鞄を取り開け中からベルトの様なものが出てきた。
その形状はスイッチが４つくぼみに入っており右端にはレバーがあ
った。
「死ね！！！」
ゾディアーツが大きな剣を召喚し二人を切りかかるが一夏が少女を
横に押し出した。
「え？君！！」

その剣は一夏に向け、まっすぐ降ろされた。
〜あ、僕死んじゃうのかな。短い人生だったな。さよなら、お姉ちゃん〜
一夏が目をつむり痛みに耐えるが一向に痛みは来なかった。
不思議に思い目を開けるとそこには、壁にまで吹き飛ばされうずくまっていた怪人がいた。
「くそ！！なんなんだ！？さっきの衝撃波は！！」
「もしかして…君！！」
「な、何？」
少女が慌てて一夏に近寄るとベルトを一夏に持たせた。
するとスイッチが突然、輝きだした。

「やっぱり。ねえ、君。まだ、生きたいよね？」
「……当たり前だよ！！僕は生きたい！！生きてまたお姉ちゃんに会いたい！！」
「うん。だったら、このベルトを使って」
「これを？」
「うん。これを使えばあいつを倒せる」
「うん、分かった。後僕は君っていう名前じゃない。織斑一夏だよ」
「私は如月太陽」
一夏はベルトを受け取りお腹のあたりに持っていくと自動的に腰に巻きついた。
「これ、どう使うの？」
「赤いスイッチを押してみて」
「う、うん」
一夏は４つの赤いスイッチを順番に押していくと音が鳴りだし４つ押すとカウントが始まった。
『３・２・１』
「え？え？」
「右のレバーを引いて」

「う、うん。えっと、変身！！」
一夏がレバーを引くと辺りに突風が吹き荒れた。
「く！！」
「きゃ！！」
風が収まるとそこには…
「な、何これ」
「それがフォーゼ！！」
「フォ、フォーゼだと！？ここで潰す！！」
怪人が驚いたようにフォーゼの名を言うと剣を片手に
襲いかかってきた。

「うぉぉぉぉぉ！！！」
「え、えっと。もう、どうにでもなれ！！」
一夏がオレンジ色の１と書かれたスイッチを押すと音声が流れ
右腕にロケットが現れた。
『ロケット・オン』
「おぉぉぉぉ！！！ほ、本物のロケットだ～」
腕のロケットが本物の様にジェット噴射をし始め
一夏は怪人を巻き込みながら壁を突き破り外へと出ていった。
「うひゃ～あれがフォーゼの力か～」

「おぉぉぉぉ～目、目がまわる～」
「ふざけやがって！！」
一夏はロケットの余りにも噴射が強く勝手に回っていたがそこに怪人が
勝手に突っ込み勝手に吹き飛んだ。
一夏はどうにかしてロケットスイッチをＯＦＦにしたが酔ってしまった。

「あ～気持ち悪い」
丁度、しゃがんだとこに怪人の剣が過ぎていった。
「おりゃ！！」
「ぐぅ！！」
一夏は怪人に蹴りを入れて距離を取った。
「他には～これだ！！」
『ランチャー・オン』
右足にミサイルが搭載されたランチャーが出てきた。
「ミサイルといえばこれでしょ！！」
『レーダー・オン』
ベルトの左のスイッチを入れると左腕にレーダーが出てきた。
「よし。ロックオン！！喰らえ！！」
ミサイルが勢いよく怪人に向かって発射され怪人に直撃し空中に上がった。
「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」
「よっしゃ！！止めだ！！」
『ロケット、ドリル・オン』
「このレバーを押すと」
『ロケット、ドリル・リミットブレイク』
レバーをもう一度引くとベルトから電子音声が流れ
左足のドリルが勢いよく回転しだした。
「喰らえ！！ロケットドリルキーーーーーック！！！」
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
怪人はドリルに貫かれ大爆発を起こしスイッチを残して消え去った。

「おぉぉぉ～目、目がまわる～」
一夏はドリルが地面に刺さりそのまま回転をしていた。
「と、止まった～」
「やったね～一夏！！」
隠れていた太陽が一夏の傍に嬉しそうにして近寄って来た。

「うん！！で、このスイッチはどうしたら」
「これはね。こうするの」
太陽がもう一度スイッチを押すと消滅してしまった。
「ひと先ず、もうすぐ迎えが来るから待っていようよ！！
さっき、家の人を呼んだから」
「うん、ん？」
一夏は突然、何かに気付いた様に後ろを振り返った。
「どうかしたの？一夏」
「いや、さっき誰かに見られてたような気が」
「誰もいないよ。気の所為でしょ」
「そうだね！！」
こうして二人は無事に帰る事が出来た。

プロローグ　初・変・身（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
４作品目となる作品です！！
頑張っていきますので応援よりしくっす！！

プロローグ2　緊・急・事・態

ある建物の一室に丸い椅子に座り先程のスイッチを持った男性がいた。
目の前にはサソリの様な姿のゾディーアツが跪いていた。
「報告を頼むよ、スコーピオン」
「はい。下部組織からあれを所持している人間を捕らえたと報告が入り向かったところどうやら、あれは一人の少年の手に渡りさらにはフォーゼに変身しました」
「ほ～。という事はその少年も関係者かい？」
「いえ。どうやら一般人の様です」
「何？」
「どうやら別の組織に誘拐された少年のいた場所が偶然下部組織と同じだったみたいです」
「そうか…これは面白い事になってきたな」
「如何しましょう」
「君には監視を頼みたい」
「かしこまりました」

一夏達はあれから無事に太陽の家族に保護され今は太陽の家で休んでいた。
「ひぇ～大きいんだね。太陽ちゃんの家って」
「そうかな～？こんな物じゃないの？」
太陽の家は普通の一軒家に比べるとはるかに大きく４階建てでさらには一部屋に一台テレビが置いてあった。
「太陽ちゃんの両親て何かしてるの？」

「……」
「太陽ちゃん？」
一夏が不思議に思い振り向いてみると太陽は涙を流していた。
「た、太陽ちゃん！？どうかしたの！？」
「私のお父さんはね、私が小さい時に死んじゃったの」
「ご、ごめん」
「ううん。良いよ、一夏は知らなかったんだし。それで、お母さんはね
会社の社長さんなんだって」
「お母さんのお仕事知らないの？」
「うん。お母さん、忙しくてたまにしか帰ってこないし帰ってきたとしても
また、すぐにお仕事に行っちゃうし」
「じゃあ、この家には太陽ちゃん一人だけなの？」
「うん。家賃とかはおじいちゃん達が払ってくれてて家事とかは
私が一人でしてるの」
「寂しくないの？」
「寂しいよ」
太陽は涙を手でぬぐいながら話しているが涙は一向に
止まらずに服を濡らしていった。
「だったら僕が傍にいてあげる！！」
「え？」
「君が寂しいなら僕がその寂しさを和らげてあげる！！
それにまた、太陽ちゃんゾディーアツに襲われてもいけないから
僕がフォーゼになって護ってあげる！！」
「本当？」
「うん！！ほんとだよ！！」
「ありがと！！一夏！！！」
太陽の笑顔に一夏は少し顔を赤くした。
それから、一夏は一旦家に帰り心配している千冬に無事な事を報告し

その翌日から一夏と太陽は一緒に遊ぶ間柄となった。

それから１０年後、事態は一気に急変する事となる。
一夏は幼馴染となった太陽の家でテレビを見ていた。
画面には世界で初めて男性でＩＳを動かした男、織斑一夏と表示されており
どのチャンネルに回しても同じ顔写真が映っていた。
「不幸だ」
「いつからあなたはツンツン頭の神様の奇跡すら打ち消す右腕を持つ少年になったのよ」
「は～なんで俺あの時、部屋間違えたんだろ」
「自業自得ね。ほら、新スイッチのテストをするからラビットハッチに行きましょ」
「へ～い」
一夏はフォーゼドライバーを持ち太陽と一緒にタンスに入るとその中は月面基地、ラビットハッチに繋がっておりそこでは太陽がスイッチの調整を行い、テストをするという事だった。

「じゃ、変身しちゃって」
「おっけ～」
一夏はドライバーを着け赤いスイッチを押していった。
『３・２・１』
「変身！！」
レバーを引くと一夏はフォーゼとなっていた。
「よし、今日テストするのはＮＯ５のマジックハンドスイッチよ」

「了解」
一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチに交換しスイッチを入れた。
『マジックハンド』
「よっと」
『マジックハンド・オン』
右腕に出てきたのは伸縮自在のアームが出てきた。
「へ～これ伸びるんだな」
『まあね。それで、人も持ったり投げ飛ばしたりできるわよ』
「そっか～にしても明日から一緒にＩＳ学園か～」
『そうね。一夏は嬉しい？』
「勿論。嬉しいに決まってんだろ」
『そ、そっか。じゃあ、今日はここ迄にして明日に備えて寝よう！！』
「了解」
明日はＩＳ学園の入学式である。
どんな生活が待っているのかはまだ二人には分からない事である。

プロローグ2　緊・急・事・態（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
連続更新でございます！！
感想もお待ちしております！！
それでは！！

第1話　大・遅・刻

ある部屋にけたましく目覚ましの音が鳴り響いていた。
「あ～眠い。今何時だよ……なんでだろ。６という数字が８に見えるのは気のせいだろうか」
一夏はテレビのリモコンを操作し電源をつけると左上にはデジタル表示で８時１５分とあった。ちなみにＩＳ学園の登校時間は８時２０分らしい。
「寝坊だーーーーーー！！！！！」
織斑一夏の朝はこうして始まった。

一夏はあれから3分で準備をし愛車のマシンマッシグラーというネーミングセンスゼロのバイクに乗りＩＳ学園に向かっていた。
テーブルには置手紙がありそこには、きれいな字で先に行ってるとだけ書かれていた。
「なんで太陽の奴見捨てたんだよ」
一夏はぶつぶつとぼやきながら運転していた。
「ああ、あれかＩＳ学園は……ん？あれは」
遠くの方に青いＩＳと赤色の何かが戦っているのが見えた。
「ちっ！！朝っぱらからゾディアーツですか」
一夏は校門を無理やりバイクで飛び越えるとゾディアーツに向かい最高速度で体当たりをし吹き飛ばした。

ＩＳ学園生徒会長の更識楯無は入学式も終わり教室に戻ろうとした時突然、ゾディアーツに襲われた。
「な、何あれ！？」

『更識楯無…許さない！！！！』
楯無は慌ててミステリアスレイディを展開し、武装を展開するが
一方的にゾディアーツの怪光線を何発も喰らい
エネルギーが減少していく一方だった。
「はあ、はあ、ＩＳが圧倒されるなんて、あいつなんなのよ」
『ははは！！生徒会長もこの程度か、死ね！！！』
赤色のゾディアーツに体が青く光りだし怪光線が発射される瞬間に
横からバイクが突っ込みゾディアーツを突き飛ばした。
『だ、誰だ！！』
「ｗｈｏ　ａｍ　Ｉ？」
『邪魔する者は全て潰す！！！』
ゾディアーツはヘルメットをかぶった少年に殴りかかるがそれをかわし、
後ろに回り込み蹴りを入れた。
『きゃ！！』
「き、君は一体誰なの？」
「いいのがあんじゃん。使わせてもらうぞ」
少年は楯無が先程まで使用していたソードを拾い武器として使った。
「さあ、行くぜ、行くぜ！！」
少年はソードで何度もゾディアーツを切ってひくたびに火花が散っていった。
相手も攻撃を加えようとするがそれをさせる前にソードで切られていき
攻撃が出来なかった。
『あ、あんたＩＳの武装を生身で使うとか異常でしょ！！！』
「鍛えてるから」
『くそ！！』
一夏が近寄ろうとした瞬間にゾディアーツは体から光線を
出しその爆煙でどこかに消え去ってしまった。

「逃げたか…ありがとさん。これ返すわ」
「え、ええ。貴方一体何者なの？」
「俺は」
少年が言いかけた時頭に物凄い衝撃が伝わり
頭を抱えて蹲ってしまった。ヘルメットをしているのにも拘らず。
「馬鹿ものが。１５であるにもかかわらずバイクを運転するな！！」
「げ！なんでここに」
振り向くとそこには織斑千冬がいた。
「ヘルメットを取らんか、一夏」
一夏はヘルメットを外すともう一度出席簿で頭を叩かれた。
「痛い！！何すんですか！！」
「遅刻の罰だ、馬鹿もの。さっさと教室に来い」
「へ～い。じゃあな、名も知らない女の子」
一夏は千冬に連れられ教室に向かった。驚きの連続で
頭の処理能力が追いつかない楯無を放っておいて。

千冬に連れられた一夏は１組の前で止められた。
「ここが貴様の教室だ」
「へ～い」
また、出席簿アタックを頭に当てられた。
「返事ははいだ」
「ひゃい」
一夏は頭をさすりながら千冬と共に教室に入った。
すると次の瞬間、とても甲高い声が教室中に響き渡った。
どうやら、自己紹介をしていたみたいだ。
「「「「「きゃーーーーーー！！！！！！！！！」」」」」
「千冬様よ！！！」

「私、ずっとファンでした！！！」
「お姉さまの為なら死ねます！！！」
「は～毎年、毎年、私のクラスに馬鹿どもを集めているのか？
静かにしろ！！小娘共！！！！！」
千冬の一括を喰らうと先程まであれだけ騒いでいた生徒全員が口を閉じた。
「私の仕事は貴様らを優秀な操縦者にする事だ！！！
私の言う事は全て聞け！！！理解できなくても頭につぎ込め！！！
良いな！！！」
「「「「「はい！！！！！」」」」」
「よろしい。授業に入る前に織斑、挨拶をしろ」
「は～い。俺の名は織斑一夏。趣味は天体観測。
ＩＳ学園の生徒全員と友達になる男だ！！よろしく！！！」
「「「「「……」」」」」
「…まあ良い。さっさと座れ、授業を始める」
{あんたが自己紹介しろって言ったんじゃ}
「誰が立って挨拶をしろといった」
「心を読まないでください」
こうして授業がようやく始まった。

授業の終了の合図の鐘が鳴ると同時に一夏は机にへばりついた。
「意味不。こんなもん理解できんのかよ」
「あなた以外全員理解してるよ」
「太陽か……起こしてくれよ！！！」
「私は何度も起こしたけど起きない貴方が悪い」
「そうだけどさ～」
「それよりも朝のゾディアーツの件だけど」
「ああ。目星はついたのか？」
二人は周りに聞かれない様にひそひそと喋り始めた。

「何人かはね。また、後で言うわ」
「了解」
太陽が席についたと同時に始まりのチャイムが鳴り響いた。
ちなみに太陽の席は一夏の列の最後尾である。

「…なのでＩＳを扱う時の罰則は国によって違うので
注意しておいてくださいね～。時間もいい塩梅なので終わりにしま
しょう」
２時間目が終わった時には一夏は見事に撃沈されていた。
まったく内容が理解できずにスイッチをいじってたら千冬に出席簿
で叩かれ
山田先生（１組の副担任である。ちなみに担任は千冬）に全部分か
らないと言えば
また、叩かれた。そのせいで頭皮がヒリヒリしていた。
「ちょっと、よろしくて？」
「あ？」
後ろを振り向くと金髪タテマキロールの少女が立っていた。

第1話　大・遅・刻（後書き）

こんにちわ、ケンです。
いかがでしたか？
今は学校で更新していま～す。
感想もお待ちしております。
それでは、さよなら

第2話　事・件・調・査

「ちょっと、よろしくて？」
「あ？」
「まあ！なんですの。その返事は。私に話しかけられたのですからそれ相応の返事があるでしょう」
「お前誰だよ」
「知らない！？このイギリス代表候補生、セシリアオルコットを！！」
セシリアは腰に手を置きながら威張った。いかにも女尊男卑の影響をもろに受け、
威張っている女性の良い例だった。
「……太陽～腹減った～」
一夏はセシリアを無視して太陽のもとに食べ物を貰うべく近づいていった。
「ちょ、ちょっと無視ですの！？」
「悪いけど貴方みたいな奴、一夏は大っ嫌いだから無視する習性があるの」
「な、何ですの！？貴方は！！」
「さっき自己紹介したでしょうが」
「太陽～何か持ってないか？」

「何もないわよ」
「残念～」
「あ、貴方達ねえ！！！」
セシリアが言いかけた瞬間にチャイムが鳴り響いた。
セシリアはかなりご立腹の様で地団駄を踏みながら叫んだ。
「また、来ますわ！！！」
そう言いズカズカと座席に戻り一夏も座席に戻っていった。

「では、授業を始める。あ、その前にクラス代表を決めないとな」
千冬が思い出したかのように言い始めた。
「クラス代表はまあ、言えば委員長の様なものだ。生徒会の会議などにも
出席してもらう。一度決まれば1年は変更できないから注意しろ。
誰かいないか？自薦、他薦どちらでも構わんぞ」
少し沈黙が流れた後に一人の女子生徒が手を挙げた。
「はい！織斑君を推薦します！！」
「あたしも！！」
一気に教室のほぼ全員が一夏を推薦する状況となった。
「そんなの納得がいきませんわ！！」
セシリアが机を叩いて勢いよく立ちあがった。
「本来クラス代表はクラスで最も強い人がなるものなのに
そんなＩＳに関しては全くのド素人でさらには知性も、
ないような極東のサルに任せてはいい恥さらしですわ！！
いいですか！？私はここにＩＳを学びに来ているのです！！
サーカスを見に来ているわけでは」
セシリアが言いかけた瞬間に、顔の横を何かがものすごい速さで
通り壁にぶつかった音が響いた。
生徒全員は青ざめながら、中には体を震わし恐怖を示す生徒もいる
中で
何かを壁に投げた張本人の方向を見た。

「さっきからゴチャゴチャとうるさいな～イギリスも
飯マズ王者の座に何年居座ってんだよ」
「わ、私の祖国を侮辱しますの！？」
「あんたが先にしたんでしょうが」
後ろから声が聞こえたかと思うと太陽が立っていた。
太陽も相当いらついてるらしく声にいらつきが混じっているのが
こちらからでも分かった。

「私は侮辱などしていませんわ！！」
「自分の事は棚上げか。代表候補性が聞いて呆れるわね～」
「こんなやつがクラスメイトかと思うとこの先が思いやられるな」
「け、決闘ですわ！！」
「私はパスね。体弱いからＩＳで戦えないし」
太陽は生まれつき体が弱く運動などは一切できない虚弱体質だった。
しかし、なぜかＩＳの適正はＢなので合格したが
来年は整備課に進もうとしているらしい。
「俺もいいや。どうせ俺が勝つし」
「あ、貴方ねえ！！」
「そこまでにしろ、馬鹿ども。立候補者は織斑とオルコットに
両名だ。二人は来週に模擬戦をして勝ったほうがクラス代表になれ。
意義は認めん！！それと織斑、机は投げるもんじゃないぞ」
一夏の席には机があるはずなのだが机はなく後ろの壁に投げられて
いた。
その光景を見た女子生徒は顔を引きつらせ心の中で、織斑君は怒ら
せてはいけない
という１組特有の暗黙のルールが完成した。
こうして来週に模擬戦をすることが決まった。

放課後、一夏は帰り支度をしていた。
ＩＳ学園は全寮制なのだが寮の部屋がまだ、決まっていないという
ので
１週間は自宅登校となっている。
「一夏～帰るよ～」
「太陽は確か寮じゃなかったのか？」
「そうだよ～一夏もだよ」
「いや、俺は」
「さっき山田先生から聞いたんだけど政府からの通達で

寮住まいにしろってさ。それで、一夏は私と同室だよ」
「分かった。ついでに部屋であの件について話すか」
「おっけ～」

一夏と太陽は自室に入るとなぜか、部屋にタンスがあった。
「なんでここにこれがあるんだ？」
「ラビットハッチに繋がってるのはこれだけだからね。運んでもらった」
「ん～了解。じゃ、入るか」
二人は玄関のドアのカギが閉まってるのを確認し
タンスに入るとその中はラビットハッチに繋がっていた。
中は案外広く、着きに出られる出口やアストロスイッチを調整する
調整室に一夏がテストをする部屋もあり
テーブルや椅子も完備されていた。
「まず、あのゾディアーツはオリオンゾディーツよ。
スイッチャーの目星は今のところ二人」
太陽は持っていたカバンを開けるとそれは普通のカバンではなく
アストロスイッチを収納できさらにはデータ分析もできる特殊なもの
のだった。
「襲われた人を考慮に入れると怪しいのはここの会長の妹の
更識簪、それともう一人は3年の鶴見桜。理由は妹さんのほうは
姉との間に溝があるの。3年のほうは更識楯無の事を何故か憎んで
いるわ」
「その理由は？」
「まだ、分からないわ。情報が少なすぎるわね」
「ん～なら、俺も探してみるか」
一夏は椅子から立ち上がり出口へと向かっていった。
「どこに行くの？」

「ちょっと事情聴取。太陽は引き続き頼むわ」
「了解」

一夏は今、生徒会室の前にいた。
理由は会長の楯無に話を聞くためであった。
「失礼しま～す」
「は～いって君は今朝の」
生徒会室には楯無一人だけが椅子に座っていた。
「あんたに聞きたいことがあるんだけどいいか」
「ええ、いいわよ。座って」
「ひとまずあんたに聞きたいのは鶴見桜の事についてだ」
「鶴見さんがどうかしたの？」
「あんたさ～鶴見ってやつに恨みとか、かわれてないか？」
「……」
楯無は何か思い当たる節があるのか苦い顔をしていた。
「何かあるのか？」
「ええ、まあね。あれは去年の話ね。彼女は前の会長よ」
「ふんふん」
「ここの会長は最強の人がなるものなんだけど、私はその人と
勝負して勝っちゃったのよね～」
「別にそれだけなら」
「でも、その勝ち方がいけなかった。みんなの前で私は
その人に圧勝しちゃったのよ。それで、その人はみんなに」
「みんなに笑い者にされたというわけね。２年のくせに
１年に負けた奴っていうことで」
「うん。それで何回も謝りに行ったんだけど取り合ってくれなくて」
「そういうことね…あんたは仲直りしたいのか？」
「勿論よ。このまま、うやむやにしちゃいけないし」

「だったら俺に任せろ」
「え？」
「俺にいい考えがある」
一夏は自分の考えに自信があるのかその顔は余裕に満ちていた。

第2話　事・件・調・査（後書き）

こんばんわ、ケンです。
如何でしたか？できれば感想を頂ければ幸いです。
作者自身は感想でパワーアップしますから。
ま、感想を送るのは読者の皆様なのでこんな事を言ったら
駄目ですね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。
それでは

第3話　ラストワン

現時刻は７：３０.
第６アリーナに一人の女子生徒が佇んでいた。
名前は鶴
リボンの色を見るとどうやら3年生の様だ。
彼女の右手には一枚の手紙が握られており内容は明日の
７：３０に第６アリーナに来てくれというものだった。
「誰がこの手紙を出したのよ」
「それは私が出しました」
急に声が聞こえ後ろを見るとそこには更識楯無が立っていた。
「何の用よ！！また、謝りに来たって言うの！？」
「はい。あの時は」
「黙れ！！あんたのその顔が気に入らないのよ！！あの時だってそうだった！！
あんたはそうやって上から目線で他人を見下しているのよ！！」
「そ、そんな事は」
「あんたが気づいていないだけよ！！私以外にも貴方を気に入らない奴なんか
この学校にいっぱいいるのよ！！」
「あ～それは賛成だな」
楯無の後ろにはいつのまにか一夏が立っておりその隣には
太陽もカバンを持ち立っていた。

「誰よ、あんた！！」
「俺もこの人に会った時にまず初めに感じたのは
他人を見下してるって感じがしたかな」
「……」
楯無は顔を俯かせたままあげようとしなかった。

「でもさ、こいつは良い所もあるんだぜ」
「良いところ！？」
「そう。こいつはあんたに勝った日からずっと周りの誤解を解いていっているんだよ。
あの人は弱くなんかないって。私だって負けかけたって」
「そ、そんな事！！」
「別に嘘と思うならずっと思っとけ。でもな、スイッチを使って憂さ晴らしを
しようとするな。それは人間を喰らうぞ」
「う、うるさい、うるさい！！！」
『ラスト・ワン』
桜のゾディアーツスイッチが変化しまるで眼球の様な
おぞましい形に変化した。
「だめ！！それを使ったら自力で元に戻れなくなっちゃうわよ！？」
「おぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」
桜がスイッチを押すとオリオン座の星座が浮かび上がり黒い何かに
包まれた後、桜の肉体だけが眉に包まれ外に排出された。
オリオンゾディアーツの姿は先程とは変わっていないが両手に
楯と棍棒のような物が新しく装備されていた。
「太陽。会長さんを安全な所に」
「うん。さ、会長こっちに」
「え、でも彼は」
「大丈夫。あの人は」
一夏はドライバーをつけ赤色のスイッチを順番に押していき４つ
押すとカウントが始まった。
『３・２・１』
「変身！！！！」
レバーを引き腕を空に向かってあげると頭上に輪っかが現れ
煙が吹き出し、煙が晴れるとそこにはフォーゼがいた。
「仮面ライダーだから」

「宇宙来たーーーーーーーーー！！！！！！！」
『な、なんなの貴方は！？』
「仮面ライダーフォーゼ！！タイマンはらせてもらうぜ！！！」
「か、仮面ライダー！？」
一夏はオリオンゾディアーツに向かっていった。

「行くぜ、行くぜ！！」
一夏は連続でパンチを撃つが先程とはけた外れに強くなっており
あまり効果が無かった。
『そんな物効かないわよ！！！』
「うわぁ！！」
一夏はオリオンゾディアーツの棍棒で殴られ吹き飛ばされてしまった。
「くそ～だったら新スイッチだ！！！」
一夏はロケットスイッチを取りマジックハンドスイッチをはめた。
『マジックハンド』
「よっと」
『マジックハンド・オン』
「そんな物で何をするのよ！！」
「こうやるんだよ！！」
一夏は右腕を振り回すとマジックハンドが伸びオリオンゾディアーツに
直撃し怯ませるとそこから何度も叩きつけた。
「くっ！！邪魔なのよ！！」
オリオンゾディアーツはこん棒でマジックハンドをたたき折ろうとしたが
一夏が腕を引きマジックハンドを戻すと空振り隙が出来た。
「もらったぜ！！」
「え、きゃ！！」
一夏はマジックハンドでオリオンゾディアーツを掴むと思いっきり

横に振り回し始めた。
「おらおらおら！！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「ふっ飛びーーーー！！！！」
オリオンゾディアーツを思いっきり投げ飛ばし壁にぶつけると
レーダースイッチからベルが鳴り響いた。
『レーダー・オン』
『スイッチの場所が分かったわ。左胸にあるわ。奪ってＯＦＦにして頂戴。
でも、ここでの止めは危険だわ』
「どうして？」
『前に解析した時よりも体内にエネルギーが溜められてるの。
それをここで爆発させたらアリーナは軽く吹き飛ぶわよ』
「じゃあ、どうすれば」
『宇宙（そら）でやりなさい』
「空？」
すると後ろからパワーダイザーとバイクが自動でこっちにまで来た。

『マシンをダイザーにセットして』
「分かった」
一夏はバイクに乗りダイザーに向かうとビークルモードだった
ダイザーがタワーモードへと変わった。
『マシンセット。タワーモード』
「おお～発射台か～」
『よし』
太陽が遠隔操作でダイザーの小型ミサイルを放つと
オリオンゾディアーツはミサイルにより空高くあげられた。
『な、なんなのよこれ！！！』
『３・２・１、ブラストオフ』
「行っけーーーー！！！！！」

『きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
ダイザーからロケットを飛ばす要領でバイクが宇宙に向けて
オリオンゾディアーツごと空に行った。

「おら！！」
『きゃ！！』
一夏はバイクをその場に乗り捨て、浮かび上がるとロケットとドリルをオンにした。
『ロケット、ドリル・オン』
「いくぜ！！」
『ロケット、ドリル、レーダー・リミットブレイク』
レバーを引くと現段階でオンにしているスイッチの名称が発音されコズミックエナジーがフルチャージされた。
「喰らえ！！ロケットドリル宇宙キーック！！！！」
『きゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
ドリルで貫かれスイッチを残してオリオンゾディアーツは爆発した。宙に浮いたスイッチを一夏が回収した途端に地球の重力により引っ張られ落下を始めた。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！何かないのか！？何か～これか！！！」
一夏はレーダースイッチを交換しパラシュートスイッチを付けた。
『パラシュート。パラシュート・オン』
左腕にパラシュートが開かれ速度は落ちゆっくりと落下していった。
「ふぃ～」

アリーナに帰ってきた一夏はゾディアーツスイッチをＯＦＦにするとスイッチが消滅し桜が目を覚ました。
「ん、ん～」

「大丈夫ですか！？鶴見さん！！」
「更識さん…ごめんね」
「え？」
「私貴方のこと勘違いしていたみたい」
「私の方こそごめんなさい。見下すような発言をして」
「いいのよ。これからこの学園を頼むわよ」
「はい！！」
その光景を一夏と太陽はほんわかと眺めていた。
「終わったな」
「うん。帰りましょうか」
一夏と太陽は帰ろうとした時、楯無に呼びとめられた。
「あ、あのありがと！！なんてお礼したらいいか」
「お礼はいらないからさこの事は秘密にしておいてくれ」
「ええ、分かったわ」
「クラス代表戦頑張ってね。一夏君」
「あ～気が向いたらな」
こうして楯無と桜の溝は無事修復された。

第3話　ラストワン（後書き）

こんにちわ、ケンです！！！
如何でしたか？人を怒る時とかはちゃんと冷静に考えないと
いけませんね。オリジナルのゾディアーツも随時募集しております。
それでは

第４話　決闘の始まり

一夏と太陽は朝早くからラビットハッチでスイッチのテストを行っていた。
『今日のスイッチはＮＯ，９、ホッピングスイッチよ。実戦で使えるか試して頂戴』
「了解」
『ホッピング』
「よっと」
『ホッピング・オン』
スイッチを入れると左足にホッピングが現れたのは良いが突然、跳躍をはじめ狭い部屋の中を壁にぶつかりながらもあっちこっちに飛んでいった。
「な、なんだこれ～」
一夏は慌ててホッピングスイッチを切るとようやく跳躍が止まった。すると部屋に太陽が入ってきてドライバーからホッピングスイッチを取った。
「このホッピングスイッチは使えないわね。調整しても無駄ね」
その言葉を聞いて一夏は太陽からスイッチを奪い取った。
「あ、ちょっと！！」
「この世の中に無駄なもんなんてねえ！！俺が証明してやる！！」
「は～。なら、頑張ってね。そろそろ時間だし行きましょうか」
「おう」
時計は７：３０を示していた。

「織斑、お前の専用機が届くのに少し時間がかかる」
「は？」

４時間目の終わり際に千冬にそう言われた一夏は何を言っているのかさっぱり分からないといった顔をしていた。
「1年生のこの時期に専用機！？」
「良いな、良いな～私も専用機欲しいな～」
やはり女子の皆は専用機が欲しいみたいで一夏の事を羨ましがっていた。
本来専用機は企業の代表か国家代表候補生でないと貰えないと言われており
終始、専用機持ちは特別扱いされている。
すると後ろの方からセシリアの声が聞こえてきた。
「それを聞いて安心しましたわ。訓練機で私に挑んでは
あっという間に終わってしまいますからね。ま、唯一入試試験で
教官を倒した私の実力からすれば当り前ですわね」

「入試試験て教官を倒すやつか？」
「それしかありませんわよ」
「なら、俺も倒したぞ」
「わ、私だけだと聞きましたが」
「それは女子の中ではじゃねえの」
「あ、貴方ねえ！！」
セシリアが突っかかろうとした瞬間にチャイムが鳴り響いた。
「今日はここまでだ」

太陽と一夏は食堂で昼食を取っていた。
食堂のメニューは和・洋・中全てが取りそろえられていた。
「ちょっと良いか？」
「ん？ああ、箒か」
隣にトレイを持った篠之ノ箒が一夏たちの隣に立っていた。

「一緒に食べても良いか？」
「どうぞ、ご勝手に」
箒は一夏の向かい側の席に座ると今日の日替わり定食である
サバ味噌定食を食べ始めた。
「一夏、この女誰？」
「篠之ノ箒、前に話したろ。セカンド幼馴染だよ」
「ああ」
「そんで俺の隣にいるのが如月太陽」
「篠之ノ箒だ。よろしく頼む」
箒が握手を求めようと手を出すが太陽はそれを無視して
昼食を取っていた。
「悪いけど私は一夏としか友達にならないから」
「は？」
「ああ、悪いな。こいつは昔ちょっとあってさ俺にしか懐かないん
だよ」
「そ、そうか」
三人が話していると上級生の生徒がこちらに近づいて来た。
「ねえ、君が織斑君だよね」
「ええ、そうですが」
「代表候補生と模擬戦するんだよね？だったら私が教えてあげよう
か？」
どうやらＩＳに関して教えてあげようとしてるようで
周りの女子生徒は、「先、越された！！」とか言って悔しそうにし
ていた。
「ん～結構です」
「え？何で？織斑君は素人よね？代表候補生をなめたらいけないよ」
「お言葉ですが俺の方が強いんで。それじゃ。行こうぜ、太陽」
「ん～おっけ～」
二人はトレイを返却しそのまま食堂を去っていった。

それから日にちは過ぎていき決闘当日となった。
Ａピットには千冬と麻耶、それに太陽と箒がいた。
しかし、肝心の一夏の姿が見当たらなかった。
「如月、あいつは何をしているんだ」
「一夏は今頃、寝坊だーーーー！！！とか叫んで慌てて
こっちに向かってますよ」
するとピットのドアが開き入ってきたのは慌ててきたようなので
寝癖もそのままな一夏がＩＳスーツを着て入ってきた。
そこにすかさず千冬の出席簿アタックがさく裂した。
「痛い！！！何すんですか！？」
「遅刻の罰だ。馬鹿もの」
「ですが、肝心の俺の専用機持遅刻してますけど」
すると奥の方から麻耶が一夏の名を連呼しながら
こっちに向かって走ってきた。
「織斑君、織斑君、織斑君！！！」
「落ち着け、山田君」
「は、はい！！ふ～。織斑君の専用機が届きましたよ！！」
「そうですか。で、どこに？」
「これが織斑君の専用機、白式です！！！」
ピットの倉庫が開くとそこには無駄な色が無い
白一色のＩＳが鎮座していた。

「へ～これが白式か～」
「織斑、時間がない。初期化、最適化は実戦で行え」
「了解」
一夏が白式を纏うとまるで待ち望んでいたかのように
白式が悲鳴を上げた。しかし、この悲鳴は一夏以外には

聞こえていなかった。
〜そうか、そんなに嬉しいか。俺も嬉しいよ〜
「一夏、調子はどうだ」
「最高の気分だよ。姉さん」
「そうか」
ＩＳのハイパーセンサーでないと分からないくらいに千冬が
小さく微笑んだ。
「太陽、箒、行ってくるわ」
「ああ、勝ってこい！！！」
「ま、楽に行ってきなさいな」
一夏はピットからフィールドへと出た。

フィールドには既にブルー・ティアーズを纏ったセシリアがいた。
「あら、よく逃げなかったですわね。貴方にハンデをあげますわ」
「あ？」
「私が全力で戦えば貴方がぼろ負けするのは自明の理。
ですから、ハンデを差し上げますわ」
「は〜。入らねえよそんなもん。全力で来い」
「良いですわ。後悔させてあげますわ！！」
会場に始まりを告げるブザーが鳴り響いた。
「いきますわよ！！」
セシリアは手始めに大きなライフル、スターライトｍｋＩＩＩをコ
ールし
一夏に向けて発射した。
それを一夏はギリギリでかわすとセシリアは一瞬、驚いたような顔
をしたが
すぐさま冷静になり攻撃の手を激しくした。
「さあ、踊りなさい！！私とブルティアーズが奏でるワルツで！！」
「おどりは苦手なんだよな〜」

一方ピットでは４人が観戦していたが箒だけが何故かイライラしていた。
「何故、あいつは攻撃をしないのだ！！それよりも如月！！何故、貴様は試合を見ないんだ！！！」
太陽は椅子に座り宇宙についての論文を見ていた。
実は太陽はわずか１４歳で国にも認められた天文学者であった。
今の研究対象は専らコズミックエナジーである。
「だって明らかにこの試合は一夏が勝つし、そもそも一夏と闘うんなら
代表候補生じゃ無理。代表でもヴァルキリークラスでようやく勝負になるって言う感じかな」
「如月、何故貴様はそう言える」
千冬はなぜ、そこまで一夏を評価しているのかと聞いたが逆に太陽はこう聞き返した。
「織斑先生は一夏の事はどう思いますか？」
「奴はＩＳに関しては完全に素人だ。今の実力では代表候補生と戦えても勝つことはできんだろう」
「ふ～ん。ま、良いや。一つだけ言っておきますね。この世界で一夏ほど経験豊富な人物はいませんよ」

「はあ、はあ。試合開始から３５分。粘りますわね」
セシリアは息を切らしていたがそれに対し一夏は少しも息を切らしていなかった。
「そりゃ、どうも」
「ですが、これで終わりにしますわ！！！ブルーティアーズ！！」
セシリアの背中から４機のピットが射出され一斉にレーザーを放ち

始めた。
さらに発射の間隔はバラバラで初心者にはきつい装備だったが
それを一夏は全てかわしていく。
〜こいつは俺の最も隙のある部分を狙ってくるのか。それにこれの
操作中は
奴は他動作不可能になるのか。…そろそろ行くか〜
一夏は武装一覧を見るとそこに表示されていたのはまだ、名もなき
刀だった。
〜ブレード一本…上等！！〜
「遠距離武装の私に近距離武装で挑もうとは愚の骨頂ですわ！！！」
「それはどうかな？」
一夏は近くにあった一機のピットをブレードで一閃すると爆発が起
きた。
「な、そんな！！！」
「射撃技術は認めよう。でも、そのスタイルが教科書通りで
自分オリジナルが無いから折角の利点が台無しだな。例えば」
一夏はセシリアに向けてブレードを投げつけるとセシリアは慌てて
回避したがピットが制御不能になってしまい
その隙に一夏は素手で残りのピットを破壊した。

「な！！」
「ピット操作に集中しすぎて他の事が眼中にないな。さあ、フィナ
ーレと行こうか！！」
一夏はセシリアに一気に近づこうとした瞬間に白式に異変が起こっ
た。
突如、白式が輝きだしたのだ。その輝きは余りにも眩しく
セシリアは目をつむってしまった。それは観客も同じだった。
『待ってたよ。一夏』

第４話　決闘の始まり（後書き）

こんばんわ、ケンです！！
如何でしたか？感想もお待ちしております。
それでは

第5話　Ｉ　ｗａｓ　ｗａｉｔｉｎｇ　，Ｉｃｈｉｋａ

一夏を包んでいた光が消えるとそこには白式を纏った一夏がいるのだが
白式の形状が先程とは異なり、背中には純白の翼が装備されていた。
「ま、まさか一次移行（ファーストシフト）！？貴方今まで初期設定で戦っていたんですの！？」
セシリアが何か言っているようだが一夏は全く聞かずに武装の一覧を見ていた。
そこにはやはり近接ブレードが１本あるだけなのだがその名前が雪片弐型となっていた。
それは一夏の姉、千冬が使い世界最強へとのし上がった剣だ。
〜そっか〜俺は姉さんの刀を受け継いだのか〜
「雪片弐型」
一夏がそう呟くと雪片弐型が一瞬にして生成され一夏の手元に現れた。
それを一夏は雪片弐型を空に向けてあげそのまま下ろした。
「え？」
一夏が雪片弐型を振り下ろすのと同時にスターライトｍｋ？が何かに切られたように折れてしまった。
「あ、貴方一体なにをしましたの！？」
セシリアは困惑しながらも距離を取り残りのビットからミサイルを放つが
一夏はそれを通り過ぎざまに斬り伏せた。
「俺は昔からそうだ」
「何を言ってますの！？」
一夏は止まったかと思うと突然独り言のように呟きだした。
「幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が奪っていたんだ。あの人だって恋愛や好きな事だってしたかったのに

俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を
受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！」

ピット内では先程の一夏の言葉が響いていた。
『幼いころから姉さんに世話ばかり掛けて姉さんの自由を俺が
奪っていたんだ。あの人だって好きな物や好きな事だってしたかっ
たのに
俺の為にそれらを全部我慢して俺をここまで育ててくれた。
でも、それも今日でお終いだ。俺は姉さんの剣を
受け継ぎ今度は俺があの人を護る！！あの人だけじゃない！！
俺に少しでも関係がある奴は俺が全員、護る！！』
「馬鹿ものが、いつあんな言葉を吐く程成長したのだ」
千冬はその言葉を聞き涙が止まらなかった。
さっきまでまだまだと思っていた弟がこんなにまで成長し
悲しさもあるが嬉しさが多かった。
「先輩、これどうぞ」
「ああ、すまない」
千冬は麻耶からハンカチを受け取り涙をぬぐうがそれでも
涙の量は変わらなかった。

「さっきから貴方は何を言ってますの！？」
「そんなのは忘れろ。これでフィナーレだ」
一夏が雪片弐型を撫でるように触れると
エネルギーがチャージされ青白く光り輝き始めた。

「それと俺は手加減が出来ないから注意しろよ」
一夏が雪片弐型を振るうと同時にセシリアがミサイルを発射したが
エネルギーの斬撃はミサイルを一瞬にして破壊しセシリアに直撃し
試合終了の合図が鳴り響いた。
『試合終了、勝者織斑一夏』
その瞬間、アリーナは凄まじい歓声があがった。
先程の戦いを観戦し頬を赤らめるものや自分も負けていられないと
やる気が出て気合いを入れる者などもいた。
「「「「「きゃーーーーー!!!!!」」」」」
そんな中で悲鳴が聞こえ一夏は振り向くとISが解除され
そのまま真っ逆さまに落ちていくセシリアの姿が見えた。
どうやら先程の一撃で気を失っているようで動こうとしていなかった。

「セシリア!!」
一夏はすぐさま追いかけるが向こうの方が早く、追い付けなかった。
〜さっき言ったじゃねえか!!俺に少しでも関係のある奴は
全員護るって!!こんなとこで破ってたまるかよ!!!〜
『力を貸してあげる』
〜え?〜
頭の中に声が響いたと思うとスラスターが全開放され
先程とは比べ物にならない速度が出てギリギリ、セシリアの腕をつ
かめた。
「あ、危ないとこだった。セシリアは…寝てるか」
一夏は教師達にセシリアを引き渡し自分もピットに向かっていった。

「お帰り一夏」
「ああ、ただいま。太陽」

一夏を迎えたのは二人の幼馴染だった。
「強いんだな、一夏は」
「そりゃどうも。でも、まだまだだな」
「織斑……」
「はい」
「そ、そのなんだ・・・お疲れ様」
千冬は顔をそむけながら恥ずかしそうにしながら言った。
「あ、え、はい。それで、セシリアは」
「オルコットはただ、気絶しただけだ」
「そうですか…あ～疲れた」
「お疲れ様です。織斑君」
振り向くと後ろに白式の待機形態であるガントレットと分厚い本を1冊
持ち後ろに立っていた。
「今は白式は待機形態で眠っていますが織斑君が呼べば
いつでもきますから。それとこれは専用機持ちの制約です。読んで
おいてくださいね」
「分かりました。太陽、箒帰ろうか」
「ああ」
「おっけ～」

その後箒とは部屋の前で別れ今は二人きりとなった。
「あ～疲れた」
一夏は部屋に入るなりベッドに倒れこんだ。
「シャワーくらい浴びてきたら？汗臭いわよ？」
「ん～了解」
一夏は疲れと眠気からふらふらとおぼつかない足取りで
シャワールームに入っていった。
一夏がシャワーを浴び始めたのを確認すると太陽は先程の

模擬戦を録画した物を見ていた。
『俺が護る！！！』
「は～。やっぱり一夏はカッコいいな～」
太陽は顔を赤く染めて体をくねらせながら惚気ていた。
一夏とはもう１０年近くの付き合いである。それに一夏は格好いいので
太陽が惚れるのも時間の問題だったが中学の時に遂に惚れてしまったのである。
理由は入学式でガラの悪い先輩にしつこくナンパされていたところを一夏に助けてもらったのだ。その時にも、太陽は俺が護ると発言しその時に惚れたのであった。

「流石わ一夏ね～長年ゾディアーツと闘って来たせいか戦闘技術は千冬さんにも
引けを足らないほどにまで強くなったし。それにさらにかっこよさに磨きがかかってるし、また惚れ直しちゃった。ふふ」
「あ～スッキリした。悪いけど俺もう寝るわ」
「うん。御休み一夏」
「ああ、御休み」
一夏はよほど疲れていたのかものの数分で眠りについた。
〔ふふふ、一夏。覚悟しててね。絶対に私に惚れさせてあげるから〕
太陽は含み笑いをしながら今日の行動は終えた。

第5話　Ｉ　ｗａｓ　ｗａｉｔｉｎｇ　，Ｉｃｈｉｋａ（後書き）

こんばんわ～宿題に追われているケンです！！
如何でしたか？少し言っておくと今作の白式の
ワンオフアビリティーは零落白夜ではありません！！
どんなものかは出るまでのお楽しみ。
皆さん、考えてみてくださいね～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6513z/

インフィニットストラトス　　３・２・１、フォーゼ来たーーー！！

2011年12月25日00時56分発行